

第18回藤崎優次郎賞 受賞記念講演

日本豚病研究会 第18回藤崎優次郎賞

馬場 建一 (北里第一三共ワクチン株式会社 品質管理部)

Baba, K. (2013). Japan pig veterinary society, 18th Yujiro Fujisaki Award

Proc. Jpn. Pig Vet. Soc. 62, 1-2.

キーワード：日本豚病研究会、藤崎優次郎先生、ワクチン

はじめに

今日は、日本豚病研究会第18回藤崎優次郎賞を受賞いただくことができましたこと、会員の皆様にお礼申し上げます。

今日はこの機会をお借りしまして、日本豚病研究会の歴史、藤崎先生とのエピソード、ワクチンができるまで、これからの日本豚病研究会についてお話いたします。

日本豚病研究会の歴史

この会の前進は、小平の家畜試験時代、豚の病気に興味がある研究者が集まり、豚の病気に関する情報交換の場として、いまから約48年前に「豚病問題懇談会」が始まりました。この間、つくば移転等で中断しました。藤崎先生は、これを機に、もっと多くの人に役立つ研究会にしたいという思いからいまから約31年前の会員は52名で昭和57年4月に「豚病研究会」発足しました。この中には、津田会長はじめ、2人の幹事の先生もおられます。

この年の研究集会は豚病問題懇談会から数えて第22回で、つくば家畜衛生試験場・大会議室で昭和57年6月開催され、これより春と秋の年2回研究集会が開催されるようになりました。

当初は、会長はじめ幹事の先生方は、会の特徴であります、ユニークな運用の一貫として、まずはお金をかけない事で、費用がかからない会場を探す事でした。とくに、遠くから来られる会員が参加しやすい場所を見つける事でした。当時は会場の準備は、事務局と協力いただける人で行い、最初は、スライド方式で行っていたため、演者の先生方、スライド担当者も大変ご苦労されました。もちろん、聴講された会員も暗くて、暑い中、熱心に勉強され、活発に質問されていました。

会報第1号の発行は昭和57年12月1日であります。

会報11号からは、「日本豚病研究会」と改め、編集委員を置くことにより、学術的にも進化し、今日に至っています。

今日受賞させていただきました藤崎優次郎賞は平成4年に先生の寄付により、平成5年に設立されました。

平成7年度より、時代の流れで会費が1000円から、1500円に変更され、このとき、藤崎先生は会費上げなくちゃだめなのとポツリとつぶやいておりました。

藤崎先生とのエピソード

先生との本格に会話するようになった始まりは、家畜衛生試験場を退職されたあと、昭和61年に北里研究所付属家畜衛生研究所に来られたときであります。この年、事務局から「豚病研究会」の会費を藤崎先生からいただいて下さいとお願いされた、上司の山岸先生が私に貰ってきてお願いされ、ぶしつけに、先生、豚病研究会の会費をいただきにまいりましたと声をおかけしたところ、先生はエッ僕も払うのと答えられ、私はすかさず、会費はどなた様も頂きますと言ったところ、はい、この間3秒あり、判りましたと会費1000円を払っていただきました。のちに、山岸先生から、何と言って会費をもらったのかと、言葉は大丈夫だったとか心配になり、自分はなにか失礼なことをしたのかと当時は自責の念にかられました、今思うと当時は、イエスマンで怖い者しらずの面があったのかもしれない。後で判った事ですが、当時は会費のことをだれも言えなかったようです。私にとっては、それ以来、馬場君ときらくに呼ばれるようになり、会合など機会があるごと末席に参加させていただけるようになり大変光栄に思いました。

研究集会終了後の懇親会では、先生はそれとなく私に、耳打ちで、こうゆう席ではね、初めて参加する人は、1人で隅のほうに居る事があるんだよと言われたことがありました。どうもあの隅にいる人が気になる

みたいでしたので、私はその方の所に行き、どちらから来て頂いた先生か聞き、先生に紹介しました所、その方も、先生もとても満足され、以後、懇親会に参加するようになりました。こうした所にも会員に対する先生の気配りを感じました。と同時にこれ以後、私の指命と認識いたしました。

長年、ワクチン製造業務に従事していると、楽しい事は少なく、辛かった事が多かったです。とくに辛かったのは、国家検定で迷入否定試験が不合格に

なったときでした。この表は、簡単ですが、モルモット腎臓で作る生ワクチンのフロー図です。ここの迷入否定試験は、不合格後、確認した場所です。

当時、新規に迷入否定試験が導入されたばかりの年で、原因究明で大変な思いをしました。

原因はコンベを使用したためでした。この後、SPFを用いる事で解決したのですが、ワクチンを安定供給できるようになるまでは非常に長い時間がかかり、行政、各メーカー並びに生産者にも多大なる、ご迷惑をおかけしました。

これをうけて、藤崎先生から品質管理を強化したいとの意向もあり製造から品質管理の業務につきました。先生いわく、これからの物作りは品質管理がしっかりしないと、高品質のワクチンが社会に供給できない。まさに、その通りでありまして、この出来事を忘れずに日々、試験検査にあけています。

これからの「日本豚病研究会」について

本会の目的は、会則にもうたっておりますように、会員がお互いに協力しあい、豚病の診断、予防に関する技術の向上を図り、情報交換を行い、豚病のより良い防除体制の確立であります。

この会は、初めから特別な枠を設けて考えるのではなく、会員の皆さんのご意見を踏まえて運営されています。また、単なる知識を得るばかりでなく、会員が抱えている共通の問題について共同体制で望み、実行を伴う具体的な事業を企画する場として活用できるようになるとよいのかと思います。

藤崎先生は、この会は行政、学校の生方およびメーカーなど多方面にわたって、専門家が多く参加されているので、会員はこれをおおいに利用し、持ち帰っていかせばよいのにと、口癖のように言っておりました。私もそのように思っております。

最後に、取りとめのない話でありましたが、皆様の

寛容なる気持ちで、これからの「日本豚病研究会」が益々発展していくことを祈念して、挨拶とさせていただきます。

謝辞

今回、推薦ならびに司会をしていただきました、長井伸也先生（日生研）に御礼申し上げます。

本日は、ありがとうございます。